神さま、それをお望みですか

或る民間援助組織の二十五年間

曾野綾子
Ayako Sono

文藝春秋

神さま、それをお望みですか

或る民間援助組織の二十五年間

曾野綾子 Ayako Sono

文藝春秋

神さま、それをお望みですか
或る民間援助組織の二十五年間
一九九六年十月二十五日　第一刷
（定価はカバーに表示してあります）
著者　曾野綾子
発行者　和田宏
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）三二六五―一二一一
印刷　凸版印刷
製本　加藤製本
万一、落丁乱丁の場合は送料当社負担でお取替致します。小社営業部宛お送り下さい
ISBN4-16-352130-5
© SONO AYAKO 1996
Printed in Japan

目次

第1章　最初の一滴　7
第2章　パン焼き窯の中のガーゼ　22
第3章　数時間の生涯　37
第4章　難民業という職業　52
第5章　犬からの寄付　68
第6章　幸福の配当金　81
第7章　どっちにしろ飲み代　96
第8章　深き淵より　111

第9章　アフリカの朝は……　127
第10章　懲りない修道女たち　142
第11章　もう一人の母　155
第12章　三人の遺言執行人　169
第13章　守護の天使たち　183
第14章　憎悪の研究　196
第15章　貧困学事始　210
第16章　シャンデリアの死骸　224
第17章　掃除は女中の仕事　237

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第18章　融ける家　253
第19章　神の摂理の修道会　268
第20章　希望のバラ　282
第21章　失われた希望　296
第22章　ビールの愛とセメントの心　310
第23章　お入り下さい　324
第24章　ワン・ルーム・スクール　339
第25章　悲しさと優しさの岸辺　354

装幀　神長文夫

神さま、それをお望みですか

或る民間援助組織の二十五年間

第1章　最初の一滴

題に拒否反応を示す方は、まずこのページを開けることもないだろうと思うのだが、もし嫌なものみたさに数行を読んでくれる人がいれば、その人たちのために、私は自分の立場を説明するべきだろう。

世の中には神の嫌いな人がたくさんいることを、私はよく知っている。私を妹と思ってくれている従兄も、私の親友の一人も、来世や神を全く信じない。でも、彼らは私を捨てない。ほんとうにありがたいことだ。だから私はできることなら、人の前では、神のことなど全く匂わせずにいたい。都合のいいことに、私は信仰が深くないから、それらの人たちも、私が特に話題に出しさえしなければ、神のことなど思い出しもしなくて済むのである。

しかし私の四十二年間の、作家生活と家庭生活以外の時間を語る時、この方――神――を登場させずに語ることもまた、却って不自然になることがある。神は、神学者にとっては偉大な存在だが、私にとってはしばしばユーモラスな経過を楽しまれる方として登場するので、そのおかしさを無理に排除してしまうと、話がぎこちなくなってしまう。

ほぼ私と同じ年代の女性ばかり六人と一人の男性の公認会計士とで、私は今「海外邦人宣教者活動援助後援会」(Japan Overseas Missionary Activity Sponsorship, 通称JOMAS(ジョーマス))という、いわゆる政府のODA(政府開発援助)の外にあってNGO(民間組織)と呼ばれる民間のグループを作って働

いている。この援助組織は、その名前が示す通り、海外で働くカトリックの神父と修道女の活動を助けるための資金と物資の援助を目的としている。しかしそれは布教のためではない。寄付をしてくれる人々の九割がクリスチャンではないのだから、教会を建てたいとか、伝道婦の派遣費を出してほしい、というような申請は、自動的に断っている。

費用はすべて、困っている人たちのための、住居、薬品、食料、衣料、教育のいずれかの目的に使われるものか、それらのものを届けたり、用途を監督したりするのに必要な車両の購入費に当てられる。援助を出す相手を邦人宣教者、つまり日本人の神父と修道女に限ったのは、出したお金の追跡を容易にするためであった。申請者が現地に留まって、そのお金が最初の目的にそってきちんと使われているかどうかに責任を持つことを条件としたのである。

この組織を動かしている六人は、経歴も性格も全く違う人たちであった。メンバーについてはおいおい紹介することにするが、この六人はできればほんとうはこういう面倒なことはやりたくなかったのであった。積極的によいことをしようという趣味の人は、一人もいないのではないかと思われる。暇があったら、その時間に昼寝をしたり、温泉にでも入ってだらりとしていたい、と考えそうな人ばかりなのである。

いや、人の考えを憶測したりするのは無礼というものだから、今の言葉はただちに撤回することにしよう。ただ、私たちは誰もが、「いいこと」をするのに、いささかの羞恥を持っていたと言うことはできると思う。少なくとも、私はカトリックの修道院の経営する学校に、幼稚園の時から入れられたおかげで、戦前から「慈善」とか「善行」とか言われることをするように言われ、そのためにこうした「慈善」や「善行」にアレルギー反応を起こすようになってしまった。クラスの中でも、いい子が率先してそういう善行をして、特別に大きなメダルをもらう。一種の勲章である。私だってその銀色のどっしりしたメダルを、胸に白いリボンで下げてみたかった。しかし私は、小説を書こうという

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ほどに根性の捻ね曲がった性格だったから、いいことをして褒められるのはどうも恥ずかしくてたまらないし、何もしない方が私らしいのではないか、という結論に達したのである。

ただ運営に携わる六人の女性たちは、共に外国暮らしが長いか、海外に深く係わって暮らして来た人たちばかりであった。外国の文化、ものの考え方の違いもいやというほど知っている。援助という金銭の係わる仕事をする時、甘い夢を抱くのは危険であった。悪気はなくても、すべてのことにのんきな人がいかに外国には多いか、ということも、骨身にしみて知っている。日本が経済大国になり、円が強くなると、日本人からみれば僅かな金でも、それが発展途上国へ行けば信じられないほどの使いでがあり、日本からの援助物資も横流しすれば、その国の関係者の懐に莫大な利益を与えることになるのもよく知っている。だから、善意のだらしなさと悪意の流用を防ぐために、私たちは日本人の神父と修道女をお目付役に「利用」させてもらうという方法を取ったのである。

私の疑い深さは、昔から、ほんとは人には隠しておきたいほどのものであった。しかし私は疑うこともなく信じるということは、人に対してはむしろ不誠実になる、と思っていた。見ずに信じることが可能でしかも意味のある対象は、神だけである。人は深く疑った後で、その人への尊敬を確立すればいい。

どんなに聖職者だと言っても、その人が家庭を持っていれば、当然そこには私有財産に対する欲求が出て来る。奥さんが指輪がほしいといえば買ってやりたくもなるだろう。子供をいい学校へ送りたくもなるだろう。そのようにして、聖職者が援助のお金を遣い込むことは、かなり自然に考えられるのである。

しかしカトリックの聖職者たちは、条件としてはその点をクリヤーしていた。彼らは、生涯を信仰のために捧げると誓う時に、自由意思で結婚しないことも同時に神に対して約束するのである。それが嫌なら、神父や修道女にならなければいいわけで、実際、修練期間中に、修道生活を目指している

人たちは、いくらでもやめるチャンスを与えられる。

カトリックの聖職者の中に、この掟に背く人が一人もいないとは言わない。もし神父が女性との間に子供を持つような状態になった時には、教会は、その子供の幸福を優先するから、神父には教会で働く職を解き、結婚生活に入ることを許した例を、私はいくつも知っている。しかし一般的に言って、神父や修道女たちの多くは、闊達で陽性な人が多いのも特徴であった。ことにこの裕福な日本の生活から意識的に離れて、アフリカや中南米の途上国に行って働こうというような神父や修道女は、筋金入りだ。この人たちを信じなかったら、他のどの組織の運営の当事者を信用するというのだ。

世の中には、川の源流の最初の一滴が滴り落ちる光景を突き止めるのが趣味という人がいて、こういう組織についても、それがどこから始まったかに興味を持っていてくれる。一部は私が既に書いていることなのだが、自分の作品を、多くの方が眼を通していてくれるだろう、と過信するわけにもいかない。とすれば重複するのを承知で、経緯を述べるほかはない。なお、私の感覚としては常に敬語を使いたいのだが、文章の簡略化のために、敬称を略することも、お許し願いたいと思う。

それは、一九七二年のことだということになっている。私自身は、年代の記憶があやふやだったのだが、後になって別の人から教えられたのである。

或る日のことだった。私は一通の電話を受けた。彼は韓国人だと名乗り、私の作品を韓国語で出版したのだが、韓国には（当時）日本の作品に版権を払う国際法上の義務がないので、お金は払いませんが、とにかくお知らせします、ということだった。

私はおかしく、少し腹だたしかった。

出版に関してはベルン条約に加盟していない国は、原作者に対して何も払わなくていいのだということくらい私も知っていた。台湾も中国も、その当時は韓国もこうした出版物はすべて海賊版である。

これは、文化を大切にする国としてはいささか恥ずかしい行為であろう。韓国がベルン条約に加盟したのは、ソウル・オリンピック以来である。

払わなくて済む場合には、黙っていればいいのに、この人は、律儀に知らせて来ただけ純情なところがある。そう思って、実は私は相手に好意を抱きかけていたのだが、素直でない私は、そんなことは素振りにも出さずに言ったのである。

「規則上、お払いにならないのはかまわないんですけど、あなたの会社が、私の作品で少し儲けが出るとしたら、それに対して全く何もお払いにならない、というのは、どこか筋が間違っているとはお思いになりませんか？　何パーセントお出しください、とは言いません。ただいくらかでも、韓国のどこかの施設に寄付をなさって下さったらどうでしょう」

私もかなり出版界の事情というものを知っているから、その会社が私の小説で儲けるだろう、などと、実は本気で思っていたわけではない。韓国の人口は日本の三分の一強だから、読書人口も従って多くはない筈だ。とすれば、私の小説など出しても、大きな赤字を出さないことを祈るばかりである。しかし私はそういうことには、一切気がついていないふりをしたのである。

それに、その時の私の心には、ほんの僅か相手に対して他罰的な気分もあった。悔しいからお金を出させてやりましょう、という感じである。しかし相手は、私の気持ちなど全くわからないように聞き返した。

「どういうところに寄付をしたらいいでしょうかね」

そんなこと知るものか、というのがその瞬間の私の気持ちだった。もし私が日本の出版社で、ニューヨーク在住のアメリカ人の作品を無断出版し、相手に、「いいですよ。どこか日本の施設にその分寄付してくれれば」と言われた時、「日本のどこの施設に寄付しますか？」と聞き返さないだろうと思う。そんなことを聞いたって、先方が答えられるわけがないからである。

しかし驚いたことに、その時に限って、私は寄付してもらったらいいかもしれない先を知っていたのである！　こういう偶然を、世間の人は何と言って楽しむのだろう。私たちはそれを慎みを欠く態度で、「神さまの思し召し」と言うのである。

私はその直前に、日本の「カトリック新聞」で、韓国のソウルから車で一時間ばかり南に行った安養（アンヤン）という町で、ハンセン病患者たちの村を経営している李庚宰（イキョンチェ）という神父が、施設を整えるために日本のあちこちの教会で募金活動をしているという記事を読んだのであった。日本は韓国に対して心を踏みにじるようなことをたくさんやったけれど、悪いことだけをしたわけではない。よいことだけ、或いは悪いことだけやるということは、通常の人間にはできないことだから、それができるのが神と悪魔だという概念ができた。人間はその中間にいて、ややいいことをしたり、かなり悪いことをしたりする。

朝鮮半島に対して行った数少ないいいことの中に、日本のハンセン病対策がある。もちろん患者の収容の方法には、今から考えると、非人間的なものがあったという記録は残っているが、それは朝鮮半島の特殊事情というより、日本の中でも同じような悲惨と悲劇があったのである。『日本らい史』（東京大学出版会）の著者、山本俊一はその経緯を正確に書いている。

しかし日本には昔からの皇室のハンセン病に対する関心と理解があったおかげもあって、対策は他国に比べて制度的には手厚く行われていた面もあった。それは朝鮮半島においても、基本的に同様であった。

戦後、韓国のハンセン病患者が一時的に増加したのは、ハンセン病が結核とよく似た菌によって引き起こされる病気だから、戦後の栄養の悪さも問題である。また一部の風評によると、患者たちを出して、その建物を他の目的のために使ったから患者が殖えた、という説もある。

李神父は、長い日本領時代の後遺症と、終戦後の貧しさの中で、悲惨な状態にあった韓国のハンセ

ン病患者に、人並みな生活をさせるために、聖ラザロ村という患者たちの村を作った人であった。ラザロは聖書のなかに出て来る「ライ患者」で、イエスの奇蹟によって墓の中から生き返ったといわれる人物である。

「ヨハネによる福音書」は次のように書く。

「この病気は死で終わるものではない。神の光栄のためである。神の子がそれによって光栄を受けるのである」(11・4)

聖ラザロ村の名は、恐らく聖書のこの部分に由来している。

私は、私の本の出版社の者だという人に、「たとえば聖ラザロ村のような所に何か寄付してくださったらどうですか?」と言った。相手は「では、そうします」と言って電話を切った。それで私は聖ラザロ村のことなど、きれいに忘れてしまったのである。正直なところ、自分がお金をもらえない話など、覚えている必要もなかったのである。

それからしばらく経って、私は当の李神父から電話を受けた。神父は私からのプレゼントを受け取っており、今、日本に来ているので、是非会いたい、と言った。それで私はようやく、海賊版の一件を思い出したのである。

初めて神父に会った時、私は神父が丸顔の童顔なので、自分より年下だとばかり思いこんだが、あまり日本語が達者なので、「どこで日本語をお習いになりました?」と尋ねて、初めて神父が、日本領時代に日本人小学校に通わせられて、日本語を覚えた世代の人だということを知ったのであった。

その時神父は、聖ラザロ村に係わるまでの経緯を簡単に語った。うろ覚えなので、事実に間違いがあったら、それはすべて私の記憶の悪さの結果である。

神父はまだ若い時、今の聖ラザロ村のある場所からあまり遠くない教会の神父だった。谷には、貧しいハンセン病患者たちが、人間の家とは思えないような掘っ建て小屋を建てて住みついていた。

日本領時代の結果もあったろうし、韓国の戦後は、朝鮮戦争の一応の終焉を見た一九五〇年過ぎにやっと始まったわけだから、福祉の面で遅れても当然だったろう。

当時のことを神父は、実に正直に語る。

若い李神父は、谷間に住む貧しい患者たちの死が近くなると、終油の秘跡と呼ばれる宗教的な儀式と祈りをしてやってください、と頼まれて、よく彼らの掘っ建て小屋にでかけることがあった。そこは不潔で、気持ちがいい場所ではなかった。患者だから差別したのではない。不潔というものは、どこで誰がそのような状態であっても決して快適なものではない。

まもなくアメリカに留学が決まると、李神父は内心ほっとした。これでもう、あの谷間の人たちのことを考えずに済む。しかし、アメリカ留学から帰ると、神父はまた吸い寄せられるようにそこへ帰って来てしまった。

細かい経緯は、神父も語らない。しかしこの谷間の人々のことを誰よりも思っていたのは李神父だったのである。何という誠実な執着だ。人の心は、本気で他人を思い、責任を持ってその人と係わる時、必ず屈折した部分を持つようになる。その方がむしろほんものなのだ。

とにかく神父は谷に帰って来た。患者たちの生活を人並みなところまでレベル・アップさせなければならない。

韓国の政治的情勢を見ると、韓国人でいるよりアメリカ国籍を取った方が、自由に外国にも出られ、仕事がし易い。李庚宰神父はアメリカ国籍を取り、一切の政治活動に加わらないという態度を取り続けたが、神父は誰よりも韓国人らしい心を持った人であった。

この時、私が神父に出会ったことは川の源流の地点に立ったことになる。具体的には二つの現実的な仕事が、水滴が滴り落ちるような姿で始まったのである。

最初の一滴は、当時ほとんど無医村に近かった聖ラザロ村に、日本から一人の医師が往診を始める

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com